週刊観光経済新聞
宿泊・旅行業・運輸・自治体（観光全般）
第2部

学生がつくる旅行プラン

ANTAがコンテスト

高校教育旅行特集

全国旅行業協会（ANTA、二階俊博会長）は、毎年開催している「国内観光活性化フォーラム」に合わせて、「学生がつくる着地型旅行プランコンテスト」を実施している。開催地の都道府県を楽しめる着地型旅行プランがテーマとなっており、前回は「高知県」を舞台としたプランを募集した。

ANTAは、2月14日に高知県高知市で「第13回国内観光活性化フォーラムinこうち」を開催し、会場で「学生がつくる高知県の着地型旅行プランコンテスト」の受賞者を表彰した。

このコンテストは、若者の発想で斬新なアイデアに富んだ旅行商品の企画を募集するもの。前回は四国4県在住の高校生以上で学校に在籍する学生を対象に実施し、16作品（26人）の応募があった。

最優秀賞は高知県立須崎高等学校3年の松岡茉理子さん、尾崎瑠花さん、下元永遠さん、井上まりもさん、西森楓さん、鍋島歩さんの共同作品「ブラベル～手ぶらで須崎を満喫し、良縁祈願ツアー～」が選ばれた。優秀賞には、高知市立高知商業高等学校3年の片岡美月さんの作品「高知の食がつまった皿鉢ツアー！みんなあ高知でおなかいっぱいにならんかよ！」と、高知市立高知商業高等学校3年の松田修幸さん、北澤宏海さんの作品「高知の自然知っちゅうかえ?」の2組が決まった。

ほかに特別賞として3組が選定された。

応募した学生たちが作った、「ブラベル」の旅行プラン企画書（左）とチラシ（右）

入選作、評価のポイント
近藤副会長に聞く

ANTAの近藤副会長

「学生がつくる高知県の着地型旅行プランコンテスト」で入賞したプランはどんな点が評価されたのか。ANTAの近藤幸二副会長に聞いた。

◇　◇

――高知県の着地型旅行プランとして今回は16作品（26人）の応募があった。

「高知県は大型のレジャー施設や温泉街がない。全作品に共通していたのは、おいしい物を食べたり自然の中でリフレッシュしたりする体験型であるところ。応募資格は高校生以上の学生だが、大学生や専門学校生からの応募がなく、すべて高校生の作品だったこともあり、本当にどれも優劣つけがたかった。どの作品にも情熱が感じられた」

――優秀賞は2作品。

高知市立高知商業高等学校3年の作品「高知の食がつまった皿鉢ツアー！みんなあ高知でおなかいっぱいにならんかよ！」が選ばれた理由は。

「いろいろな地域に名物があるのだが、高知といえば皿鉢料理というイメージがある。皿鉢料理の特徴は、名物だから当然おいしいのだが、大きな皿にどんと出てくるので迫力もある。シンプルに皿鉢を前面に出していて、食べ物に関するツアーの中ではこれが最も良かった」

――同じく高知商業高等学校3年の作品「高知の自然知っちゅうかえ?」も優秀賞に入選した。

「まず『知っちゅうかえ』というタイトルに目が引かれた。これは方言で『知っているか』という意味。プラン内容は、かつおの藁焼き体験、ホエールウォッチング、酒蔵見学などがあり、全般的に見て高知らしいという評価だった。高知はなかなか飲ませ上手、飲み上手だから、酒蔵の見学もある」

――次回の学生がつくる着地型旅行プランコンテストは、国内旅行活性化フォーラムの開催地である福島県のツアーがテーマになる。

「福島県は東日本大震災の影響で、観光入込客数がまだ落ち込んでいる。コンテストの開催で福島県を含めた東北全体の復興に協力したい」

最優秀賞は手ぶら観光
優れたアイデア
プロ見ても良作

行程表

日	内容	ポイント
1日目	須崎駅に集合（12：00）→　駅前食堂にて鍋焼きラーメン（13：00）貸切バスで音無神社、加茂神社参拝　→　久礼道の駅へ移動（14：30）自由行動　→　大正市場散策（15：30）→黒潮本陣へ移動（16：30）→　カツオの藁焼きたたき体験（17：30）黒潮の恵満載の夕食　→　太平洋を望む展望露天風呂　→　久礼八幡大祭　→　黒潮本陣泊	①本場鍋焼きラーメン ②音無神社は宮内庁がお忍びで祈願に来た神社 ③大正市場で食に出会う ④カツオの藁焼き体験 ⑤壮大な露天風呂体験
2日目	起床（7：00）→　朝日を浴びて露天風呂　→　ホテル発（9：00）→　須崎港（10：00）→　タイラバツアー（10：00～13：00）※釣り道具一式、弁当込み（須崎湾沖）　→　桑田山温泉（14:00）※泉質優良温泉で疲れを癒す　→　温泉を出るころには釣った魚のお料理完成　→　ヴィラサントニーニ移動（17：00）高知のエーゲ海で夕日を見ながらのディナー泊	①本格タイラバツアー ②太平洋をプレジャーボートで颯爽と！ ③釣った魚はすぐに調理 ④名泉桑田山温泉 ⑤ヴィラサントニーニ
3日目	起床（4：00）→　野見漁協（4：30）　→　定置網漁船体験（5：00～7：00）　→　野見漁港で朝食（8：30）　→　野見湾シーカヤック体験（9：30）※ウエットスーツ、カヤック全て完備　→　海上レストラン（12：00）→　須崎駅へ（13：00）→　須崎駅解散（13:30）	①定置網漁体験 水平線からの夜明け ②取れたて魚朝食 ③シーカヤック体験 ④海上レストラン ⑤無理のない日程
特典	①　全行程「高校生ガイド」が同行します。各ポイントでは高校生が説明させていただきます。 ②　３日目は１３：３０解散ですがなんと！延泊可能！延泊の方は、ご希望により民泊もご紹介します。 ③　料金はすべて込み込み価格。しかも、タオルにいたるまで現地準備。何もお持ちになる必要なし！	手ぶらで参加！

◆企画概要

旅行の対象者	全国（都会）に住む独身のアクティビティ大好き女子		
想定時期	９月～１０月頃	ツアー期間	２　泊　３　日
ツアー内容			
1. ツアータイトル	ブラベル　～手ぶらで須崎を満喫し、良縁祈願ツアー～		
2. 企画立案の背景・理由	都会に住む皆さんに、須崎市の自然の素晴らしさ、食材の豊富さ、人の温かさを手ぶらで来てもらい、須崎を満喫してもらうツアー		
3. ポイント①	■　手ぶらで参加 様々なアクティビティーを用意しているが、それを構えて持ってくるのではなく、すべて現地で用意しているので手ぶらで参加できる		
3. ポイント②	■　良縁祈願 須崎市には、強烈な良縁の神社がある。このツアー中にその神社に参拝することで、良縁を祈願してもらう。		
3. ポイント③	■　美味しい！楽しい！ 須崎はカツオ！この時期だけ食べられる「新子」やカツオのたたき体験、鍋焼きラーメン堪能など、美味しいだけではなく楽しめる！		

広島県呉市

日本近代化の躍動を体感

教育旅行の分野で、平和学習が見直されつつある。明治期、近代国家を目指した日本が軍港として整備し、海軍鎮守府を置いた4都市、神奈川県横須賀市、広島県呉市、京都府舞鶴市、長崎県佐世保市は2016年4月、「軍港都市　横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」として文化庁の日本遺産に登録された。

呉市では、戦後70年にあたる2015年度は、教育旅行の受け入れ学校数が前年度比6・1％増の450校、同人数が8・7％増の2万5157人と増加。2016年度は校数が1・6％増の457校、人数が3・4％減の2万4295人。10年前の2005年度は141校、8652人だった。

戦艦大和の10分の1模型や、乗組員の遺書などを展示している「大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）」の戸高一成館長は、「日本は、戦後長い間、戦争に触れないことが平和教育であると考える時代があった。しかし、嫌なこと、二度とあってはならないことほど、事実に目を背けることなく直視しなければならないのではないだろうか」と述べ、「『平和を考える』とは『過去の歴史を正しく知ること』」と強調する。

呉海軍墓地

旧呉鎮守府庁舎

歴史を正しく知り
平和を考える学習

同ミュージアムの会館は2005年4月。現在では広島市を訪れる学校のうち約10％が同ミュージアムまで足を運ぶ。

コンパクトな市内には、旧呉鎮守府庁舎（現在の海上自衛隊呉地方総監部）や呉海軍墓地、戦艦大和が生まれた旧呉海軍工廠造船部（現在のジャパンマリンユナイテッド呉事業所大屋根）など、旧海軍と共に歩んできた日本近現代史が凝縮されている。ご当地グルメの「呉海自カレー」「肉じゃが」「メロンパン」も訪れる生徒たちに人気だ。

地域の事例や課題を議論
全国ほんもの体験フォーラム

体験型の修学旅行の拡大が続いている。ある専門家によると、「高校の2校に1校は体験型の修学旅行を取り入れている」と見る。その中で、体験型観光に積極的に取り組み、成果を上げている地域の事例や課題を議論する第14回「全国ほんもの体験フォーラムin奈良・飛鳥」が3月24～26日の3日間、橿原市の「奈良県橿原文化会館」をメイン会場に、明日香村、桜井市を加えた4市町村で開かれた。

主催は、全国ほんもの体験フォーラムin奈良・飛鳥実行委員会。共催は全国ほんもの体験ネットワーク。24日の全体フォーラムには、県内外から大学関係者や観光関係者ら742人が参加。期間中は、全体フォーラムに加え、25日に課題別研究分科会を、25、26日に体験ツアーを催した。

742人が参加したフォーラム

全体フォーラムは、事例発表や記念講演、公開パネルディスカッションなどを開催。冒頭、実行委員長の森川裕一明日香村村長らがあいさつした。

公開パネルディスカッションのテーマは、「日本の活力と教育は体験交流から」。体験型の教育旅行による教育効果と地域経済に与える影響などを議論した。年間3万人を受け入れている長崎県のまつうら党交流公社副理事長の山下與範氏は「漁獲量の減少や、魚価の低迷などで漁業家庭の経営は苦しいが、民泊受け入れで別途、年間百数十万円を受け取る漁業者もいる。地域活性化にもつながった」などの報告があった。

25日に明日香村で開かれた第一分科会のテーマは、「農山漁村生活体験民泊の推進」。210人の聴講があり、民泊受け入れ家庭の維持、拡大策などが議論された。

近年、民泊受け入れ家庭の高齢化が問題になっているが、「30～40代の受け入れ家庭の発掘をしている」（西河佳子氏、滋賀県の近江日野交流ネットワーク）といった声があった。また、全体フォーラムのパネルディスカッションにも登壇したまつうら党交流公社の山下氏は、「最近、Iターンの30代家庭が移住し、民泊の受け入れも行う。Iターンが来たのは、体験型教育旅行の受け入れ事業が注目されているからなど」などと述べた。

フォーラムが開催された飛鳥地域は、明日香法、古都保存法による開発規制により守られた「原風景」が最大の魅力。民家ステイや歴史ガイドセミナーでは、この原風景が資源として生かされている。

2016年度の体験型修学旅行の受け入れ実績は84団体、5934人。インバウンドの多さが特徴でそのうち57団体、2705人が海外の教育旅行受け入れだ。明日香村の森川村長によると「民泊におけるインバウンドの比率はおおよそ50％。日本の文化や、昔ながらの日本の暮らしを知りたい、といったニーズが多い」と指摘する。

フォーラムの受け入れにあたった飛鳥ニューツーリズム協議会事務局統括の下田正寿氏は、「各地の担い手の皆さまから多くのことを学ぶことができた。この学びを今後の活動に生かしていくとともに、奈良・飛鳥における『ほんもの体験』をもっと磨き上げていくため、今後も鋭意努力していく」と話している。

ほんもの体験ネットワーク
橿原市で総会を開催

体験型観光の振興に取り組んでいる全国組織「全国ほんもの体験ネットワーク」（藤澤安良会長）の第23回総会が3月24日、奈良県橿原市で開かれた。全国から約70人が参加した。

訪日外国人教育旅行や住宅宿泊事業法（民泊新法）への対応について意見が交わされたほか、2018年度の第15回「全国ほんもの体験フォーラムin五島」の開催概要が発表された。

離島初開催となる長崎県五島市で開かれるフォーラムの日程は、来年3月21～23日の3日間。21日の全体フォーラムは福江文化会館がメイン会場となる予定。22日に課題別研究分科会を、22、23日に体験ツアーを開く。主催は、全国ほんもの体験フォーラムin五島実行委員会（仮称）。共催は、全国ほんもの体験ネットワーク。

総会の様子

次回の第24回全国ほんもの体験ネットワーク総会の開催概要も報告された。会場は岩手県久慈市。総会と併せて研修会なども行う。開催日程は、10月26～28日の3日間。26、27日がコーディネーター研修会、27日が総会、28日が体験ツアーとして「震災学習列車」「サッパ船クルーズ」を、久慈市と田野畑村で行う予定。受け入れは久慈市のふるさと体験学習協会。